

ウクライナに思う

2021-8-6

野口幹夫

石原さんが提供してくれたこのテーマは思いがけない方向へ思いを運んでくれました。

むろん日常のわたしはプーチンを憎み、毎日のニュースでロシア軍が痛めつけられて毎日少しづつでも負けていくことを心から期待する毎日です。たぶん皆さんと同じでしょう。

それと違う発想へと導かれた先は、昭和26年ごろ高津高校新聞部時代の自分でした。

我々の世代は小学校の時に生まれた平和憲法世代、これが身に沁みついた世代ですね。しか

し、高津高に入った頃から逆コースと呼ばれた時代に突

入しました。平和憲法をくつがえす再軍備への動きが始

まり、まず警察予備隊ができた時代です。高津の新聞部

は純粋に平和憲法護持・再軍備反対の声をあげました、



この写真は26年9月には同じ新聞部部員の伊藤公博君と二人で伊丹の警察予備隊を探訪

取材して、これが再軍備の中心となると告発した記事を書きました。さらに村尾行一君と京

大の天皇事件に同行、それを記載した35号S26-12-3が発送停止処分を受け、さらに27

年4月7日の特別号で再軍備反対を特集したのでした。平和憲法護持のため精一杯活動した

つもりのわが青春だったので。

その後日本に続けて南米コスタリカが軍備を持たない平和憲法を制定したと聞いたときは

いよいよ新しい時代が来るかと思ったのです。実態は日本もコスタリカも理想と現実は違っていますが。

さてここからは空想です。もしウクライナも平和憲法を持ち、理想通りに、軍隊を持っていなかったとすればどうなっていたでしょうか。ロシア軍が侵攻してきたとき、粛々と受け入れるほかありません。ロシアはウクライナ地方を我が祖国の思いをもって、その主権の中に

入れることに成功します。元来ロシアの旧祖国だったのですから、あまり違和感はありません。言葉も方言の一種位のものです。



さてそれからロシアはどんな政治を開始するでしょうか。まず外交権は奪い NATO と接近する

のをやめさせるでしょう。これが一番のプーチンの願望だったからです。それさえ達成すれば、決して農業国工業先進国ウクライナを疲弊させることはしないでしょう。併合後の全自国を豊かにすることですから。

気がつけば今の実際の大破壊は起きず、人も死にませんでした。世界も食糧難ガスの高騰などで傷つくことはありませんでした。

これは妄想でした。実際は我々が知るごとく人類は21世紀になっても野蛮なままでした。